

---

# 四柱と異世界の少女

緋月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四柱と異世界の少女

### 【Zコード】

Z3291Y

### 【作者名】

緋月

### 【あらすじ】

実の姉に異世界トリップさせられた桜里雪。『柱が折れそうだから、折れる前に修復しろ』という訳の分らない命令付きで。しかも、それを終えないと元の世界へ戻してもらえないらしい。何で私なの！？と文句を言いつつ楽しんでいる少女の異世界冒険譚、だと思います。

## 1 異世界トリップは突然に

「どうあえず、お前に任せる。頼んだ、妹よ」「はあ？」

多分夢の中。

真っ黒なローブを着た姉が言いました。

「んー、平凡な女子高生があの世界へ行つても何もできないな。ちよつとは能力をつけてやろう、感謝しろよ?」「能力云々より、状況説明してよ!」

私の抗議は至極最もなものだと思つんだけど、不愉快気に眉をひそめた姉は煩わしげに一言。

「状況かあ……柱が折れるから、折れる前に修復して来いつて事」「そんなんで分かるかーー!!」

絶叫と共に私の視界は歪み、気が付いたら……。

どいじやのステージ真っ只中に放り出されましたとぞ。

観客もステージの主役らしい踊り子も田を真ん丸にして、私を見つめている。

ステージは円形すり鉢状。下方中心に演者、それを囲むようにして観客が座っている。

しかも満席。

でもステージ上に隠れる所なんてない訳で、皆の視線を痛いほど浴びる。

急に現れたから仕方がないけどさ。

うわー、嫌だ、隠れたいって思うのも無理ないでしょ。

「ではではっ、これで最後。今回は彼女にも手伝つてもらこましちう」

いち早く我に返つたのはピンクの髪に宝石飾りを沢山つけたアラビアン風衣装の踊り子さん。

手を鳴らして観客の視線を自分に集めている。

流石演者は神経が図太いなあ、なんてのんきに考えられるわ

けがない。

「は……え、何を……」

頭の中は真っ白、言葉らしい言葉なんて出てこない。

ここで冷静な人がいたら私尊敬するわ。

それに私はそんな芸達者じやないんだもの。

私の内面を知つてか知らずか、踊り子のお姉さんは釘を刺す。

「黙つて私に従つてくださいね？」

口調も顔も優しげだが、目が本気だ。あなたのせいに台無しになる所だったのよ、と。

ものすつごく怖いんだけど……！

綺麗な美人さんだけに迫力があるんだもの。

頷く以外の選択肢なんてないわという訳で、何度も頷いて無言さをひたすらにアピール。

元々従う以外の選択肢なんてないんだけどね。状況も不明、動きようがないんだし。

まあ、なるようになるでしょう。

順応性に関しては自信あるし、気楽に構えるわ。

「ちょっとこっちへ来て。……手を」

手を差し出す踊り子さん。

「 うひ？」

私は彼女の方へ歩き、右手をその上へ重ねた。すると、彼女は笑みを浮かべて勢いよくその手を上へ跳ね上げる。いや、綺麗な笑みだつたんだよ？でも、そんなゆづくら見ていてる間はなかつた。

「 何！？嘘お…………え、ちよつ……落ち…………」

私は体「」と宙に浮いていたんだもの。きょろきょろと周囲を見るけど青、青、青……空の青以外は何も見えない。

かなり高い場所まで飛ばされたかも。

跳ね上げる勢いがどんなに強くても普通は腕が持ち上がるだけのはず……何が起きてんのよ…？

私はふよふよと浮いたまま。

足場は不安定だし、何度もバランスを崩しそうになる。

でも、その度に横を通り過ぎる風が私を優しく支えてくれた。

「 もしかして、風に意思ある…………？」

まあ、その疑問に答える声なんてあるはずもないけど。

風の声なんて聞けるはずがないし、踊り子さんは観衆へのアピールに忙しい。

そもそも、自分のいる上空まで踊り子さんの声は届かないのだ。観衆が興奮して私を指さしてるのは分かるんだけどね。

「 まあいいや。こんな経験滅多にできないし、楽しもう。やうじよ  
「 う」

さくっと切り替えて、空中散歩つていつレアな状況を思い切り楽しむわ。

## 2 状況確認は必要だと思つた

よく分らないついでに降りてきこと指示を受ける。

観客の反応を見ると大成功だったみたい。

コインやら宝石やらが降るわ降るわ。

でも、私としてはそんなことよりせつときの空中散歩のネタが知りたい。

「あれ、どんなマジック?」

「『マジック』って何でしょ?」

小声で尋ねたけど、踊り子さんは何のことやら分らないらしい。舞台上にいたからこれ以上聞くことはできなかつたのが残念。

舞台を終えて、近くの宿屋へと案内された。

まあ、急に現れたんだから色々事情は聞きたいよね。

……私も何が起きたかよく分つてないんだけど。

そういう訳でようやく私も落ち着いて現状確認できる。

えっと、名前は桜里しづく、高校1年の16歳。

あの日も塾で疲れて私服のままベッドにパタン。

そしたら夢の中に全身真っ黒の衣装に身を包んだ姉が現れて、ステージ上に飛ばされた。

何とか終わつて、ピンク髪の踊り子と一緒に宿の中。

……うん、確認終了。まだ夢を見るんだと思いたい。

指折り数えたけど、どこまでも非現実的だ。思わず逃避しそうになる。

まあ、踊り子の彼女がそれを許してくれなかつたけど。

「さてと、あの時何で急に出てきたか教えてもらえます？」

まつすぐの視線で私を射抜く。だから、顔が綺麗だから怖いんだって。

ありのまま話すべきかな？……いや、止めた方がいいわ。

自分でも信じられないことを他の人が信じる訳ないじゃない。

「分らない。何も…覚えてない」

だから首を振つて泣きそつた顔をしてみる。……記憶喪失つてことにしどこうかなって。

まあ、ここが地球じゃないことは確かだもの。

宿に来るまでに硝子のような花とか地球では見たことがない。で、私はこの世界のことを全く知らないのも事実。記憶喪失みたいなもんでしょ？

泣きたいのも事実だけさ。

予想外だったのか、踊り子の女性は少し慌てた様子。

「えーっと、ホントに何も？私はベリーって言つんけど、名前とかは…っ？」

「名前…は、零。……後は何も思い出せない」

力なく首を振る。演技をする。

怪しむ様子もなく、むしろ私のことを勞わってくれた。

「もう今日は寝ましょう。きっとシズクちゃんも疲れて混乱しているのよ。次の日になつたら何か思い出しているかもしれないでしょ？」

ベリーに無理やりベッドへ押しやられ、言われるまま横になる。

気が付いたら、白い部屋の中に閉じ込められていた。

声は反響するし、ベリーの姿はない。代わりに真っ黒いロープのお姉さんが立っている。

腕組みして偉そうに。

「夢？」

「当たり。人がいる場所に出してやつたから助かっただろう？」「どこがよ？知らない世界で、大勢の視線に晒されて、慣れない演技やって、精神的にはぼろぼろなんだけど」「いーじゃないか、フィードの奥地に一人で飛ばされるよりマシなはずだ」

確かに、ベリーに拾われたのは運がいい。

晩御飯にもありつけたし、宿で寝ることも出来たのだから。でも、納得なんてできるはずないじゃなし！

「フィードってこの世界よね？元の世界に返してよ！？」

「無理だな。前に言つただろう？『折れる前に修復しろ』と。お前が仕事を終えればいいだけだ」

ああもうつ、こつちが苛立つてんのに冷静に返していくるから腹が立つ！

「私には関係ない。やりたいなら姉さんがやればいいじゃない」

「出来るのならそつしている。神の右腕は世界に干渉できんのだ」「は？ちょっと待つて、どういふ事よ？姉さんは姉さんでしょ……

『神の右腕』って、何？

怒りは一気にそがれ、頭に浮かぶのは疑問符ばかり。

目の前にいるのは私の姉、桜里奈津のはず。

偉そうで無理難題を私に押し付けることもあったけど普通の人間だ。

少なくとも『神の右腕』とかいう、訳の分らない肩書は持つていな

「世界の管理者みたいなものだ……つと、長話は不味そうだ。では、  
また「  
そんな中途半端なところで説明を切らなこでよ、と文句を言つ聞も  
なく私は現実世界に引き戻された。

### 3 まだまだ続くよ、状況確認

「やつと起きましたね、ここを出ますよ」  
ベリーが揺さぶって起こしたらしく。

姉さんはそれに気付いたから、説明途中で去ったのかも。

「……何で？」

でも、疑問符。

辺りは真っ暗で、空には2つの月が浮かんでいる。  
出かけるには早すぎる。いや、遅いのかな？

こんな事を考えていたけど、ベリーの衝撃発言に私は今までの考え  
が吹っ飛んだ。

「身元がばれると不味いからです」

は？ちよつ、この踊り子さん犯罪者！？

「違います。私はどっちかといえば被害者ですよ？まあ、行きまし  
ょ」

私の心の声はしつかり口から出ていたみたい。ベリーは苦笑氣味。  
……かなり失礼な事言つたけど怒らない。心が広い人だわ。  
あ、もちろんちゃんと後で謝つておくよ？  
道々話すという彼女の言葉を信じて、さつさと宿を出る。  
宿の代金は前払いだったから踏み倒しにはならないみたい。  
よかつたわ、犯罪者になるのは勘弁だもの。

しばらく、煉瓦が敷き詰められた大通りを歩く。  
思ったより視界がいいのは空に浮かぶ2つの月のおかげかな。  
2つの月を見ると異世界なんだ、って改めて思い出すから複雑な気

分にもなるけどさ。

「えーっと、酷い間違いしてごめん。なら、何で逃げるの？」

そもそも逃げる理由が分らない。

「ゆつくりしてると騒ぎになるでしょっから」

首をかしげる私。だって、ベリーは犯罪者じゃないんでしょ？  
何で騒ぎになるんだろ？ 何か変な事やつたっけ？ あー… 私が急に現れたからかな。

…でも、その時も上手く誤魔化していたよ。な。  
そんな私に気付いたのか、ベリーは続けて言った。

「魔法を使ったからです」

魔法つて… もしかして、あの空中散歩の時かな？  
種も仕掛けもなかつたんだ、あれ。

まあ、異世界に来たなら魔法があつても不思議じゃないけどさ。…

…いや、でも少し変かも。

「魔法を使つたら騒ぎになるの？ 何で？」

目を丸くしてそんな私を見つめるベリー。

ちょっとした沈黙後、そういうえば記憶喪失でしたね、とぼそり。  
それなりに納得したみたい。簡単に説明してくれた。

曰く、普通の人は魔法を使えない。魔法使えるのはベリー達、ラウルの民のみ。

でも、彼らは国に保護されて自由に出歩くことは出来ない。  
ベリーは保護地域から抜け出してきた……以上。

「見つかると連れ戻されるってこと？」

「多分そうでしょうね。……あんな檻に連れ戻されるのは御免です  
檻？ 保護という言葉とは反対に物騒な例えよね。」

でも、聞き返してもベリーは曖昧に笑つて誤魔化すだけだった。  
触れてほしくないなら、今は置いておこう。

正直、自分の事で手一杯だもの。

『神の右腕』って何よ、柱って何よ……！

夢を思い出すたびにもやもやするんだから……！

「シズク、何か思い出しました？」

そんな私の内面を知つてか知らずかベリーが一言。  
自分への質問が落ち着いたから聞いただけかもしねないけどね。  
さてと、どこまで話そうかなあ。

「……『神の右腕』と『4つの柱の修復』って言葉」  
するとベリーは腑に落ちないのか、腕を組み考え込む素振りを見せた。

あれ、私変な事聞いた? ……とはいっても、私は何が変かすら分らないんだけど。

「4柱ってそれ、言い伝えですよ。神話や伝説の類です」

「言い伝えってどんな?」

「世界の4隅には天を支える柱がある。それらすべてが折れたら天が落ちて来て世界が滅ぶという話です。でも、『神の右腕』については分りませんね」

思わず沈黙。

異世界の人間を呼び寄せるんだから、伝説の柱が修復対象でも不思議はないと思う。

でも、でもさ?

これをどう探せつてのよ、どう修復しろつてのよ……！

姉さん、私を異世界に送る前に「世界觀講座」をちゃんとしてくれ……！

思わず叫びそうになる私。何とか喉で留めたけど危なかつた……。  
そんな時耳に滑り込んできたベリーの言葉。

「私の旅にはあてもないですし、シズクの用事に付き合いますよ  
優しい女神の声に聞こえたわ。

「本当！？ベリー、ありがとうーー！」

思わず笑顔でベリーの手をがしつと握りしめた。

1人で異世界に投げ出されなくて本当に良かった……。

と思つたのもつかの間。後ろから男の声がかかる。

「ねーちゃん達、待てや」と。

えーっと、要するに面倒事は思つたよつ早くやつて来たよつでした。

#### 4 まあ、いひにひもせよね

「何の用でしようか?」

余裕があるのか、ベリーは堂々とした様子で男を振り返る。私はといふと正反対。ベリーの陰に隠れ、こやつと声の主を見遣つた。

ひょろひとした男が田に入る。まあ、夜闇のせいではほつきつとは見えないけどさ。

何で陰から見てるの、とか聞かないでね?

一般の女子高生が荒事に対応できる訳がないじゃないの。

「女2人だと危ないだろ? エスコートしてやるよ」

言葉だけ紳士的でもねえ……行動はナイフを取り出しての威嚇。せめて言葉と行動は一致させてほしいんですけど。それにベリーもベリーだよ。

面倒事が嫌だから追手がかかる前に逃げるんでしょう。この歩きづらい夜に出歩いてんでしょう?

何で、出て少ししたら元気とめうれてんのよー!  
しかも、返事までしてさー!

こんな感じで私の頭は軽くパニック。

それなのにベリーは相変わらず堂々と聞き返す。

「何故私たちを?……ああ、もしかして追い剥ぎですか? 女の一人旅だから、と」

肝が据わりすぎなお姉さんだわ。

あ、言つてなかつたけどベリーは私より5歳ほど上ね。

でも、驚嘆するにはまだ早かった。

「甘く見てもらっては困ります」

次の瞬間ベリーは男に向かって振りかぶったんだ。  
しかも、よくよく見ると左右の手には既に短剣を持っている。

いつの間に！？

驚いたのは私だけじゃなかつたみたい。

切りかかられた男の方も目を見開いていたから。

ベリーが狙つたのは右腕。

カラソッ

男の手からナイフを叩き落とした音。

ベリーが使えるの、魔法だけじゃなかつたのね。

「人前で使えない物を当てにはしませんよ」

あれ、私何も言つてないはずなんだけど。

「……そんなに顔に出やすいかな？」

何も答えず、ベリーはくすくすと笑つたまま。

それでも、相手からは目を逸らさず警戒してゐるんだ。凄いな。  
でも旅をするならこれが出来ないと不味いのかも。 そう考へると少し鬱にも、ね……。

切りつけられた男も流石に我に返つたみたい。  
ベリーに掴みかかるうと手を伸ばすけど、一瞬早くベリーは飛び退く。

でもその後、すぐに距離を詰めて今度は蹴りを入れる。

それが見事に相手の腹に入り、間髪いれずに同じ場所に拳が入る。

格闘メインだったのかな、ベリーって。

ベリー 優勢な戦いだから、のんきに観戦していたのだけど。

「え、なつ、嫌……っ！」

急に身体を引き寄せられた。かと思つたら、首筋にナイフ。どうやらもう一人潜んでいて、私は人質に取られたみたい。

「おーっと、そこまでだ。こいつの命が惜しければ……」

状況や台詞から考えると、3流悪役が自分の優位を確信して命令を下す場面。

こういう時、大体は敵が墓穴掘つたり、外からの助けが来て助かるんだけど。

現実でそういうのは期待できないでしょ……！

どうしよう。ホントにどうしよう。

情けないというか、ベリーに申し訳ないというか。

「！」……「めんなさい……！」

小さくて聞こえなかつたかもしれない。でも、言わずにいられなかつた。

ベリーは両手の短剣を地面に投げ捨て、大人しくなつてている。

……ああ、もうホントに私の馬鹿つ！—隠れることすら、まともに出来ないなんて。

さつきまでやられていた男が大人しくなつたベリーに反撃する。

そりゃそうだよね、こんな好機逃す訳がない。甘んじて受けたベリ一。

私のせいだ。私が捕まらなければ……ベリーがこんな田に合はずにすんだのにっ。

悔しくて、情けなくて、でも、どうじょもなくて。

そんな時頭の中に声が響いた。

「中々いいタイミングだなあ、シズク。相手はお前に触れてるな?  
なら言え。『クロノ＝ゲイン』と『

## 5 そういうば『能力つけた』って言われた

「ちょっと、何言つてんのよー。」

この非常事態にのんきな声で話しかけてきたのはすべての元凶、姉さん。

『非常事態だからだよ。助かりたくないのか?変な妹だ』

姿は見えないけど、やれやれと肩をすくめているのが田代に浮かぶ……!

私だつて助かりたいよ?でも、訳の分らない事言われたら反論したくもある。

でも……ああ、もうひ、言えぱいいんでしょ、言えぱ、どひせひのままじや、何も変わらないし。

といつ訳で、脳内会話は一旦終了。

「『クロノ=ゲイン』……言つたけど一体何?」

頭に響く姉さんの声に文句を言つたけど、答えは別の所から。

「黙……え、な……何だ、何で……!」

私を捕らえている男の声だ。

でも、おかしい。後ろから聞こえたのはしゃがれた老人の声だもの。少し強く身じろぎしたら、簡単に振りほどけた。

振り返るとそこに立っていたのはよぼよぼの老人ただ一人。

「あれ、あんた爺さんだつたっけ?」

きょとんとする私。一応聞いたけどさ、いやいやそんなはずはない。

私を捕らえていた男はまだ若かったはず。

自分の手や腕を茫然と見ていた男は、急に叫び声を上げると慌てて逃げて行つた。

混乱と恐怖、かな。

その気持ちはよく分る。……やつたの私だけど。  
まあ、これで私の方は何とかなつた。

ふと視線をすらすと無抵抗で殴られるベリーが見える。

早く伝えなきや……！

「じめん、ベリーー私の方はもつ大丈夫、助かつたからー！」

私が叫んだら、ベリーを殴る男の動作が止まつた。  
普通だつたらその隙にベリーの反撃があるんだろうけど、今回ベリーも硬直中。

「……何やつたの！？」

振り返つて、これだけ言つのが精一杯みたい。でも、私は曖昧に笑うだけ。

だって、私も何が何だか分らないんだもの。これ、魔法？  
私が何も言わないので、諦めたのかな。

ベリーはさくつと切り替えて、目の前の男に反撃を始めた。  
腹部目掛けて蹴りを入れ、顎を田掛けてアッパー。で、男は地面にダウン。

……うわあ、動作が早い。というか、怖い。  
戦つている最中に笑うんだよ、にやりつて。戦闘狂にしか見えないよ……っ！

外見はここにいる誰より女性っぽいのに、漢だ。怒らせないようこ  
気をつけよう。

ダウンした男が起きあがつた所で、お仲間さん　さつき私がお爺

さんにしちゃつた人 が登場。

ベリーの相手をしていた男を掴んで必死になつて止めていた。  
……怯えた目で私を指差して何事か喚きながら、つていうのが悲しいけど。

止められた男の方もその老人が自分の仲間だつて分かつたみたい。服とか話し方から判断したのかな？意外と付き合いが長かつたのもね。

2人して恐怖の表情で私を見た後、脱兎のごとく逃げて行った。  
ああ、何かすつごく悲しいわ。私は普通の人なんだよ、一応。

「あの老人は？」

「私を人質に取つた人。あの時、私が老人にしちゃつたみたいでさ。ねえ、ベリー。そういう魔法つてあるの？」

「人を老化の魔法？ないはずですよ。魔法は火とか水とか自然由来のものばかりですから」

今まで平平凡凡な一般人だつたし……トリップの時に付けられた能力だよね、多分。

「そつか。……これ、私にもよく分らないんだよね。まあ、助かつたしいいでしょ？」

「シズクは楽観的すぎます。でも、まあ、いいですよ、人が集まる前にさつさと出ましよう」

空が白み始めているから、早く町から出ないとね。  
早起きの意味がなくなつちやう。

私とベリーは何事もなかつたかのように町の出口へと向かう。  
何にせよ、フィードの冒険、始まり始まり

## 6 これは誰の記憶なんだろう？

数日間歩きっぱなしの私達。

「ねえ、どこへ向かってるの？」

「イルベルの町」

行き先がはつきりしないと精神的につらい。

だから聞いたんだけど、町の名前聞いても分らないや。

結局、沈黙。

「そうですねえ、簡単に言えば本の街。少し遠いからじばらくは歩きですけど」

「そつか。神の右腕調べるため……だよね」

ベリーは頷いた。

実はあの後、夢で姉と会つたんだ。たつた一度だけど。でも、言いたい事言つて慌ただしく消えちゃつたんだよね。

「じばらくは会えない」って言葉を最後に残して。

だから、結局『神の右腕』については何も分らなかつたんだ。

さつきの能力についてはそれなりに教えてもらつたけど。

……あんな緊急時じゃなくて、もっと余裕のある時に教えてほしかつたよ、全く。

ぶつぶつと姉さんへの不満を心の中でぶちまけていたが、ベリーの言葉が私を現実に引き戻す。

「ただ、その前にこの森を抜けないといけないんですけどね」

「この森？」

「そう。近道なんですね、ここが」

早くイルベルの町に着きたい。

だからベリーの近道という言葉に乗っかるうと思つたけど……嫌だ。

入口がぽつかり空いて、中は薄暗くてどんよりしている。

淀んだような、不気味な雰囲気も感じるんだもの、正直怖い。行きたくない！

なのにベリーはすたすたと歩いて行く。

何で？怖くないの！……ああ、もう、動けこの足つ！

ようやく動いた、と思ったら後ろから引きとめる顔が。本ではなくあるペターシュガーバターンだ。ナガ。

卷之三

「ここはソラニエの森。普通の人は避けた方が無難だ」聞こえたのは低くて優しげな男の声だった。

あれ、私、知つて……？あ、駄目、かも……

ベリーの悲鳴が遠くで聞こえる。

違和感の正体を掴む前に私の意識は黒で塗りつぶされた。

目の前に空が広がっている。

でも、景色は霞がかつてゐるし、体はだるくて思つよつて動かない。

……残りの命が極僅かなんだね。きっと彼が私を抱きかかえて立つて、まる。

でも、私は最期だから彼に笑う

男の右頬に手を伸ばし、掠れる声で精一杯呟える。

彼は小さく頷くと精一杯の笑みを浮かべてくれた。

痛々しい表情だけど、その微笑みを最後に焼き付ける事が出来たから、私は幸せ。

でも、彼はずつとその記憶を持つて暮らしていく……守れなかつた記憶を、ずっと。

ごめんなさ

ふつん。

映像は唐突に切れた。テレビの電源を切った時みたいにね。  
そこで唐突に『私』に戻ってくる。

さつき私は『命の残りが少ない人』になつて状況を見ていた。  
んーと、例えるなら夢で別人になつてる感じだね。  
夢の中だと別人になつても気付かないでしょ？

自分とは違う思考回路なのに受け入れちゃつたとかさ。

ゆっくり目を開けるとベリーが私を覗き込んでいた。で、ベリーは  
肩を持つてがたがたと揺さぶる。

「シズク……！？どうしたの、大丈夫ですか！？」

脳が揺れてまた氣絶するわ…！

「ベリー、ごめん。何かよく分らないけど大丈夫だから」  
揺さぶられた後遺症で少しくらぐらしてゐるけどね。

まあ、正気には戻つたから大丈夫だよ、うん。

で、私の意識が戻つてこればさつきの映像つて違和感しかないんだ  
よね。

誰の記憶よ、これ。

私は瀕死になつた事もないし、あの男と会つた事も多分ない。

ああ、多分つていうのはその男の顔がしつかり思い出せないからね。  
『私』の気持ちは強く感じたから覚えてるんだけど、それ以外は色  
も形も曖昧になつてゐる。

まあ、私は私だから落ち着けばいいんだけどさ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3291y/>

---

四柱と異世界の少女

2011年11月24日15時45分発行